

国際学会雑感

神戸大学経済経営研究所
教授 片山 誠一

6月と7月の初めに2つの国際学会に参加し報告して来た。それぞれ国際的な研究集会としては典型的なものであった。その組織運営形態が全く対称的であるという意味においてである。

今までかなり多くの国際学会なるものに参加してきたが、今回のように対照的であるというのは、1つは小規模でワークショップ的なものと、他方は5年に一度開催され幅広い分野がそれぞれの部会を持ち報告論文総数も招待セッションと通常の貢献論文を合わせ1000本以上になるような大規模なものである。

小規模でワークショップ的なものはむしろ研究会に近く、かなり問題点が限定されており、参加者相互に旧知の研究仲間も混じり最新の成果を報告討論し、むしろ論文を作成することが主目的になることが多い。報告時間も十分とれて、討論者も付く。またその成果は、時に専門ジャーナルの特集号になったり、主催者が編集してまとめて出版するケースや *festschrift*(日本式に言えば還暦記念論文集のようなもので、顕著な業績をあげた人のために研究者が集まり研究報告会を催しその報告論文を出版し顕彰する)になる。

この手の研究集会は中に気心の知れた仲間の集まる機会となるので、その余暇も実に楽しく、ときに親しい家族との再会となることもある。これもまた学会参加のインセンティブともなる。しかし、重要なことは、小規模であるかゆえにどんなレベルの論文が出るかによる。これは、もちろん大規模な学会でも同じであるが、学会最先端の情報レベルとその量が結局問われる。

経済学の分野における大規模な国際研究集会の1つは、Econometric Society(計量経済学学会)の世界大会であろう。今年は第9回が8月にロンドンで行われる。オリンピック同様4年に一度開催されるが、第1回が、イギリスのケンブリッジ大学で行われて以来イギリスでの開催は2度目となる。アジアでは1989年東京で慶応大学がホスト校となった。毎回規模が拡大し、その運営のために主催校の負担は大変であろう。

大規模な学会では、同時平行して行われるセッションも多く、しかも報告時間が限定され報告者にとってはすぐに時間切れとなり終わることになり、物足りなさが残ることがある。しかも時には報告セッション以外にポスターセッションさえある場合がある。

大規模な国際会議の開催校は、それだけの組織運営が出来るだけの専門スタッフがいなければ難しい。しかし、引き受けを決めるのは、それだけではないようなケースもある。

すなわち、純粋にアカデミックな要因に時に政治的影響も感じられることがある。それは、運営に学会参加費以上の経費を要し、どうしても自前で資金を調達し何らかの資金援助に頼らざるを得なくなるからであろう。その大きな資金源がときに政府補助金となると、経済的に勢いのある国、特に発展しつつある国では国威の発揚を示す機会と感じられるのか、その中央と開催地の地方政府の強力なバックアップが見え隠れすることがある。特に記憶に残るのは北京で開催された I F A C（国際自動制御連盟でこれは5年に1度国際大会がある。この7月初めはプラハであり報告して来た）でいまだに忘れられない。大会初日の開会式セレモニーは、大臣や市長はじめ重鎮の長い挨拶があり多少うんざりする。このときの conference dinner は人民大会議場で催されたが、国際会議場からそこまで参加者を乗せたバスにパトカーの先導で全ての交通信号を止め、ノンストップで会場まで運ばれたのには驚かされた。国の政治形態の違いをまざまざと見せ付けられ、そのあり方を考えさせられたものである。

規模があまりに大きいとどうしても関心があるセッション以外に多くが含まれ、それに出なければ時間の余裕が出来る。疲れてホテルで休むか、開催地の見学に行くか。歳をとりにつれて、小規模会議を選ぶようになってきた。若いときは貪欲に知識を吸収するが、歳とともに関心が限定されてゆくからだろう。グローバリゼーション昨今人の集まりは国際的になるのは自然であるが、要はレベルの高い会議を選ぶことに尽きる。